

昭和42年度余市町大崎山遺跡調査報告書



積石遺跡の一部

余市町教育委員会

昭和42年度余市町大崎山遺跡調査報告書

調査実施機関	余市町、余市町教育委員会		
調査責任者	余市町教育委員会 教育長 佐藤利雄		
調査協力機関	文化財保護委員会、北海道教育委員会		
調査員	東京大学文学部考古学研究室	教授	齊藤忠
	北海道大学名誉教授(北海道文化財専門委員)		高倉新一郎
	北海道大学北方文化研究施設教授 (北海道文化財専門委員)		大場利夫
	北海道大学北方文化研究施設	助教授	大井晴男
	国会図書館東洋文庫		渡辺兼庸
	北海道大学北方文化研究施設	助手	重松和男
	北海道大学北方文化研究施設	助手	菊地俊彦
	札幌大学講師		石附喜三男
	北海道大学北方文化研究施設	事務官	吾妻親勝
	北海道大学大学院学生		木村尚俊
	余市町文化財専門委員		銀治照三
	"		永岡隆
	"		金田小太郎
	小樽商科大学生		6名
	余市町教育委員会職員		4名

調査地点 北海道余市郡余市町沢町(飛林富吉所有)通称大崎山

調査期日 昭和42年9月1日～12月20日

調査の経過

大崎山遺跡は余市町市街地の西南方約2軒の地点、標高124米の山頂並びに東南に面した緩傾斜面に位置した石積遺構である。

本遺跡は昭和31年沢田義夫によつて発見され、同37年今善作、沢口清らによつて先住者の遺構であることが確認された。

翌38年余市町教育委員会、余市町郷土研究会(当時会長今善作)並びに北海道文化財保護協会の依頼を受け、北海道文化財専門委員高倉新一郎、大場利夫らが相ついで視察を行った。

その結果遺構には石畳と積石があつて、石畳は幅1.5米、高さ1-3米、長さ100米、前後のものが数ヶ所に見られた。また積石は長さ5-12米、幅3-5米、高さ1.5-3米で、形は馬蹄形、長方形、楕円形をなしている。石畳と積石は、かなり整然と構築され、積石の平法には一定の制約があるのか、方向と配列がある。

しかも石畳と積石とは互に関連があつて、石畳は恰も積石の外郭をなすかのように構築されていることも認められた。しかしながらこれらの構築年代を決定する資料は発見されず、また何の目的のために構築されたものかについても明らかにできなかつた。

同年10月大崎山遺跡調査団が結成され、昭和40年9月に才一次調査が行われ、積石遺構才2号一基について実測図を作製し、同時に周辺地帯の状況を知るために、才2号遺構の南側について発掘を行った。

昭和41年8月18日-10月8日の50日間、才二次調査が行われた。すなわち遺構の配列を知るために8月18日より9月13日までの25日間、渡辺兼庸の指導で、水門博英、工藤義三、内田良夫(余市町教育委員会)と平田英哲子、斎藤隆、田川崇、天野努、滑川優子らによつて実測図の作製が行われた。また9月28日に余市町公民館において、参加者が集合して 当年度調査の方

針が立てられた。

41年度は計画に従つて、才6号積石遺構一基についての解体と、石塁の切り目の地点についての調査を行った。才6号遺構は形は長方形に近く、約30度の傾斜面に沿つて9段に積まれており、積石は外郭部に大なる石塊を排列し、内部には小石塊（込石）を充当しており2段目下部にピット状の掘り込みが発見された。大きさは長径1.8米、短径1.4米、深さ1.14米で、すり鉢状につくられたものであるが、内部からは人工的の遺物は発見されなかつた。

調査の概要

本年度は遺跡の全貌を知るために、遺跡全域についての実測図の作製を企図し、昨年度に引続き、その隣接地帯で積石遺構15基と、これを囲む石塁の存在する、才2地区の測量を実施する。また才1地区において昨年度解体を行った才6号積石遺構の完全解体を行い、これとの類例をあげるために才3号積石遺構の解体を行った。

積石遺構才3号の規模と構造

今年度に解体を行った積石遺構は、才3号で、昨年度解体された才6号の北方20米の地点に所在している。

本遺構は長軸をN-80°Wを示し、傾斜角27°30'の傾斜面に位置する。長さは水平距離8.95米、幅（最大幅）3.72米、高さ1.22米、比高4.7米で、形は長方形に近い。積石の手法は先年度調査の才6号と同様に積まれており、階段状をなしていることが認められるが、崩壊していて段数は明らかでない。おそらく4段をなしているように推察される。なお最下段の位置が、かなり急勾配をなしているので根石の部分がすこしく移動していた。また最上段上は平面をなしている。

積石遺構第3号の解体作業

先年度（41年）才6号遺構の解体経験によつて、本年度才3号については

中段以下の部分についてのみ解体を行った。

積石の手法は外郭に大なる石塊を並列して、その上に中石塊を積み重ね、内部には小石塊(いわゆる込石)を充している。なお構築は下段より次第に上段に及んでいることは明らかである。根石は最下段の大石塊2ヶが地山にめり込んだ自然石であるが、その他は全部並べられたもので、これらは地山に深くはめ込まれておらず、表土の上に置き並べられたものが多い。

先年度才6号遺構と同様に、才3号遺構においても下段の部分の中央部に浅いピットが発見された。(Pit. A) 大きさは長径1.4米、短径1.0米、深さ25釐である。ピットの上には厚さ53釐(中央部)に亘つて、大、中、小の石塊を積み上げ、更に粘土混りの土を盛り上げている状態が認められた。なお内部からは有機質の土壌と若干の木炭末が出土したが、文化遺物は出土しなかつた。

積石遺構才6号の完全解体

才6号については昨年度解体が日数の都合上完了せず最下段の一部が未調査であつた。その為、残された石積を除去した結果、昨年度発見されたピットは下段に向つて広がっていること及びピットと輪廓が周囲の地山に対し、はつきりと区別できることが確認された。即ち、大きさは半径2.15米の円形を成し、深さは地山の傾斜面より0.75米である。なおピットの内部は有機質の土層(黒土)で、木炭末はピットの殆んど底の部分にまで附着して出土したが、遺物は出土しなかつた。

才2地区の測量と実測図の作製

本年度は遺跡全域についての測量と、その実測図の作製に全力を集中したが、測量着手の時期が草木の最も繁茂した時期に遭遇したので、全域測量は不可能になつた。しかしながら才2地区約5,300平方メートルについては、草木の伐採を行い(他の地区では果樹園で伐採は不可能)、ここに存在している20基の積石と、これを囲む約170米の石塁について、完全測量を行い

実測図の作製を行うことができた。

なお本地区の積石の手法は、才1地区のものと若干異つており段を有せず一段で、段上は平面をなしている。



0 30m 1:1000



6号ピット



3号ピット



3号ピット



3号ピット

調査の要約

1. 積石遺構の構造を知るため、先年（昭和41年）度才6号遺構の解体を行ったが、本年度は才6号遺構の完全解体と、更に才3号遺構の解体を行った。なお才3号遺構については先年の経験上、中段以下の部分についてのみ解体を行った。
2. 才3号遺構は、長軸をN-80°-Wを示し長さ8.95米、幅3.72米、高さ1.22米、比高4.7米で、形は長方形に近く27°30'の傾斜面に沿って積まれているが段数は明らかでない。
3. 遺構の構造は外郭に大なる石塊を並列し、その上に中石塊を積み重ね、内部には小石塊（込石）を充している。なお構築は下段より逐次上段に及んでいる。
4. 遺構の下部において浅いピットが発見された。大きさは長径1.4米、短径1.0米、深さ25釐である。ピット上には厚さ53釐に亘つて大、中、小の多くの石塊が積み重ねられ、更に粘土混りの土を盛り上げていた。ピット内には有機質の土壌と若干の木炭末が出土したが文化遺物は発見されなかつた。
更にピットAの斜面上方に約1.4米はなれて、最大幅約1.5米、長さ約2.15米、深さ約40釐の半円形のピットBが発見されたが、ピットの中には大小の石が多く混入すると共に黒色土が填まつていたが文化遺物は出土しなかつた。
5. 本遺構を構築した年代と目的については、先年度才6号遺構と同様に何等の手がかりをえられなかつたが、2例に共通する特徴は、下部の同じ場所にピットを有することと、ピット内部に木炭が存在することである。
6. 才3号遺構ピット内で採集した土壌と木炭については、それぞれ陽含有量の測定と放射性炭素による年代測定を行う。
7. 才2地区の測量を行ない、実測図を作製したが、本地区には20基の積

石遺構とこれを囲む石塁が認められた。なお上述才1地区の積石遺構と才2地区の積石遺構とはその構造に若干の差異が認められる。

8. 大崎山に存在する積石、石塁の遺構は、その年代と目的はまだ明らかでないが先住者によつて構築されたことは明らかであり、遺跡を保護し今後更に研究を重ねることが必要である。

上述のことから余市町として東大斉藤教授、北大高倉名誉教授北大大場教授の意見に沿つて古代遺として国指定の申請をし保護保存に万全を期することに決定した。